アーティスト・ステートメント

粘土素材を軸に、素材そのものが持つ生命感を、陶という物質を通して鑑賞者に伝えられるよう、物語性を込めた作品制作、展示を行っている。

経歴
奈良県出身
2025 年大阪芸術大学大学院芸術制作専攻工芸領域修了
現在　奈良県の高校にて非常勤講師をしながら制作活動中

賞
2024 年 12 月　京都花鳥館賞 2024 優秀賞

入選
2023 年 9 月　にっぽん招き猫大賞展
2024 年 10 月　第 13 回国際陶磁器フェスティバル美濃陶芸部門

個展
2024 年 6 月　大阪芸術大学体育館ギャラリー　森本すぎな個展「猫を抱きしめてねむりたい」

グループ展
2023 年 11 月　大阪芸術大学大学院工芸領域「越」展
2023 年 12 月　GalleryMETABO 「土扶成牆」 展
2024 年 2 月　ギャラリー白　森本すぎな・今野志穂二人展　「たからもの」
2024 年 8 月　aigallery 「つづく陶-tsuzukutou 展」
2024 年 8 月　京都精華大学「合同陶芸展 2024」
2025 年 1 月　大阪芸術大学　「大学院修了制作展」
2025 年 2 月　大阪芸術大学スカイキャンパス（あべのハルカス）「大阪芸術大学大学院修了制作展」
2025 年 12 月　堀川御池ギャラリー「つづく陶-tsuzukutou 展」

展覧会タイトル「윤슬（ユンスル）」
展覧会コンセプト

「윤슬（ユンスル）」は韓国の言葉で、太陽や月の光が水面に反射して輝くことだ。
この言葉は日本語にはなく、私にはこの言葉が持つ美しさを完璧に理解することはできないのかもしれない。けれど、この言葉を聞いた時、光のまぶしさ、あたたかさ、波の音、におい、風の冷たさが瞼の奥に感覚として浮かびあがる。
大学院を修了し、社会という大きな海に自身の輪郭を溶け込ませていこうとする中で、寄せては返す波に削り取られながら形を変えていくしかないのだと感じるようになった。
これまで私は、焼くということに制限される陶造形に対して疑問を感じ、その制限をなくせるような「生命感」をもった陶造形のいきものをつくることを研究してきたが、環境とともに心境も変化した。制限に対して抗うのではなく、制限を受け入れ、その中で広がりを見つけていくことが陶造形に新たな「生命感」を持たせられるのではないかと考えるようになった。
「生きている」とは本来「윤슬（ユンスル）」のようなかたちのないものなのかもしれない。それでも、わたしたちはことばをもち、絵を描き、かたちをつくる。そうすることであの輝きを感覚として見せてくれた。
本展では、陶表現とともに、スケッチの展示を予定している。以前まではイメージをつなぎ留めておくために描いていたもので、展示の対象と考えていなかったが、私が今感じている「生命感」の輪郭を見つけるためには必要だと感じている。